

トヨタ財団 2012年度 アジア隣人プログラム
特別企画 『未来への提言』
報告書

インドネシアと日本の地域をつなぐ

～あいあいネット10年間のまなびあい報告～

固有の自然と文化に根ざし、多様な主体が協働し響きあう地域を目指して



一般社団法人 あいあいネット

序文

あいあいネットは、2004年5月、トヨタ財団アジア隣人プログラムの助成をうけた「いりあい交流」から始まった。「地域の自治・住民主体のコミュニティ作りを促進するため」「援助ではなく、対等のまなびあいを通じて」行おう、という活動は、インドネシア中スラウェシと日本の山村で「いりあい（自然資源の共同管理）」を守ろうと活動する人々同士の経験交流を皮切りに、中スラウェシではトンブ村での焼畑を守る村人の儀礼やその暮らしの映像記録作成、高校生を対象にした「森の名人」聞き書き活動へと広がっている。一方、団体設立当初からあった「住民主体の活動をどうやって（外部者として）促進していけるか」というあいあいネットの問題意識は、「コミュニティ・ファシリテーション」という考え方・技法との出会いを生んだ。そしてその思いを共有するインドネシアの仲間たちとともに、西部バリ国立公園における活動が2007年から始まった。国立公園職員をコミュニティ・ファシリテーターとして養成する活動は、公園周辺の村との共存・協働を生みだし、ブリンビンサリ村やスンプルクランポック村では、自然と共存した地域づくりの模索が始まっている。

あいあいネット結成10年目に入った2013年、トヨタ財団の「アジア隣人プログラム」特別企画として「インドネシア・日本 現場で学びあう地域づくり」経験交流を実施した。中スラウェシと西バリそれぞれで活動する実践家たちと、日本のあいあいネット関係者が、トンブ村やブリンビンサリ村に集い、現実を共有しながら、これまで10年間の活動を振り返っていった。これを通じて、あいあいネットの活動は、「いりあい・よりあい」に象徴される地域固有の自然や文化に根ざした暮らしのあり方を模索するという「中身」、「外部者がコミュニティに関わる際の作法＝コミュニティ・ファシリテーション」という「手法」、二つの側面が組み合わさっていることが改めて確認された。そしてそれが中スラウェシや西バリ、さらに日本の現場、それぞれの10年近い関わりの中で、少しずつ熟成・深化してきたのだ、ということが、今回の「経験交流」を通じて見えてきたことである。

私たちの社会は、全世界をくまなく覆う近代化やグローバル化の波の中で、例外なく大きな「変化」にさらされている。その変化は、焼畑稲作儀礼を守り続けてきたトンブ村にも、バリの伝統的社会と他の島からやってきた移民社会とが共存するスンプルクランポック村にも、そして過疎化高齢化が進む日本の山村にも、都会のコミュニティにも等しく及んでいる。その中で、「外から」「上から」の強制的な変化ではなく、自分たち自身の力で、「古いもの」と「新しいもの」とが共存し、多様な主体が協働する社会や暮らし方をどう創っていけるのか。これまで10年のあいあいネットの活動で生まれた経験とその学びあいを通じ、私たちがぜひとも伝えていきたいことを、この報告書では明らかにしていきたい。

2013年11月

「インドネシア・日本 現場で学びあう地域づくり」代表者 長畑 誠

（一般社団法人あいあいネット代表理事）

目次

1. はじめに	3	あいあいネットの生まれた経緯と目指すもの
2. 活動の経過	4	中スラウェシでの10年 西バリでの10年
3. 現場ではいま	10	中スラウェシの村で 西部バリ国立公園周辺の村で
4. 経験交流報告	15	パルとトンプ村訪問 西部バリ国立公園と周辺村訪問 デンパサールでのワークショップ
5. 見えてきた課題	22	「古いもの」と「新しいもの」の共存に向けて 「外部者」が村に関わる作法とは
6. 次の10年にむけて	24	
7. 未来への提言	27	
8. 経験交流参加者の声	28	

1. あいあいネットの生まれた経緯と目指すもの

私たちあいあいネットは、「地域に暮らす者たちが、いのちと暮らしを支える自然や文化を守り育み(『いりあい』)、立場を越えてパートナーとなり、合意し、協働していくこと(『よりあい』)を通じ、コミュニティの自治を取り戻す」ことを目指し、「現場に携わる者同士の『まなびあい』を促進する『ネットワーク』を広げる」ことを活動の柱として、2004年5月「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」として設立された。2009年に法人化(一般社団法人)を機に名称を「あいあいネット」として、現在に至っている。

最初の活動はトヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成をうけた「いりあい交流」だった。地域の共有財産である「いりあい林野」をコミュニティの人々が主体的に管理し、活用していくにはどうしたらいいのか。日本とインドネシアの山村をつないだ「まなびあい」はその後、焼畑を守る村人の儀礼やその暮らしの映像記録作成、高校生を対象にした「森の名人」聞き書き活動へと広がっている。

この「いりあい交流」と並行して、同じ頃、日本の地域づくりの現場と海外とをつなぐ「まなびあい」の活動を行う機会が与えられた。国際協力機構(JICA)が日本で実施する「研修員受入事業」に関連して、日本の地域づくりの実践や教訓を教材化し、さらにそれを活かして、実際に研修事業を実施することになったのである。2004年度から、世界各地のコミュニティで活動する行政官やNGO活動家たちと一緒に、日本の地域づくりの現場を訪問しながら、「地域の資源を活かした住民主体の活動はどう生み出せるのか」を考えていく場を作っていた。2013年度までの10年間でアジア・アフリカ・中南米・大洋州からあわせて200名近い研修員を受け入れ、全国20カ所の現場を訪れることができた。この経験からは、「地域づくり」の現場で直面している課題は世界どこでも似通っており、お互いに学びあえることは決して少なくないこと、ただしその「まなびあい」をスムーズに行うためには、間にたつ我々の「媒介者」としての能力が問われること、が見えてきている。

一方インドネシアでは、上述の「いりあい」交流から続く活動に加えて、バリ島西部の国立公園を舞台とした、「地域住民と国立公園の協働を促す」プロジェクトが2008年から始まった。これは西部バリ国立公園事務所が抱える「周辺の村とどう協働して自然を守っていくか」「自然と共存する生計向上をどう促していくのか」という課題の解決に協力しようとするものである。当会のメンバーとインドネシアの仲間たちが、公園職員の「村人の主体的な活動や協働を促す」ファシリテーション能力の育成にあたり、今では周辺の村で「住民と協働した自然と共生する村づくり」の活動が少しずつ始まっている。

設立当初からの私たちの目的は、10年の活動を通じて、達成できたこともあれば、まだ道半ばのことも、まだまだやりきれていないこともある。この10年で何が見えてきたのか、今後進むべき道は何なのか。今回の企画を通じて探っていきたい。

2. 活動の経過

2-1 中スラウェシとの10年

中スラウェシとのつながりは、2001年、中スラウェシを拠点に、森と土地に対する村人の権利擁護活動を奔走していたヘダール・ラウジェンさんに島上が出会ったことに始まる。

日本とインドネシアの山村の経験はかなり共通していて、互いに学びあうことでよりよい未来につながる何かが見えてくるかもしれない……。はじまりは、そんな直感に意気投合したことにあった。以来、その時々が必要と思うことに取り組んでいると、新たな出会いや気づきが生まれ、次なる活動へとつながってきた。

これまでの歩みを振り返ると、中スラウェシの活動は、出会いとはじまり(2004年頃まで)、日本とインドネシアの山村の経験をつなぐ「いりあい交流」の試み(2004年～2007年)、山村トンプでの映像記録と学びあい(2008年～2011年)、高校生を対象とした「聞き書き」研修の実施(2012年～)に大きく括ることができる。いずれの活動も、日本とインドネシアの山村に暮らす人びとと互いに学びあう視点を重視してきた。交流を通して出会った日本の山村の幾つかにはその後も通い、森の再生・地域づくりをめざした取り組みにも加わった(2007年～)。以下、中スラウェシとの交流を通じた歩みを、主な活動と出来事を通して振り返ってみたい。

出会いと始まり (2001～2004)

ヘダールさんと出会い2年経った2003年、ヘダールさんが国際シンポジウム出席のため初来日した。せっかくの機会と、島上は関西の農山村を案内。ヘダールさんは「山の神」と「入会」の存在に強い関心を示し、「イリアイの経験をインドネシアに伝えてほしい！」との言葉を残して帰国した。これがきっかけとなり、「いりあい」(村を基盤とした自然資源の共同管理)をめぐる日本・インドネシアで経験交流を進める構想が生まれた。

2004年には、長畑と島上が中スラウェシとインドを訪問。「いりあい」(自然資源の共同管理)と「よりあい」(住民自治)をめぐる「まなびあい」を、国・職業・世代の壁を越えて進めることをめざし、「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク(あいあいネット)」を立ち上げた。トヨタ財団の2年間の助成をうけ、中スラウェシと日本の山村の経験を学びあう「いりあい交流」を開始。11月から、毎月1回の勉強会を早稲田で開催、国内でのネットワークづくりを進めた。

いりあい交流の試み (2004～2007)

「いりあい交流」の第一歩として、2005年9月、日本の山村に暮らす実践家、日本の村落研究者らとともに、中スラウェシを訪問。山村マレナとトンプを訪ね、村の現状に触れ、経験を交流した。

翌2006年6月には、中スラウェシからヘダールさん、マレナとトンプの代表、地元政府役人、研究者、NGOの若者の6名を日本に招き、福島、山形、滋賀の山村を共に



村には必ず神社があり、鎮守の森があることにヘダールさんは関心を示した
[2003年7月]



早稲田奉仕園で毎月開催した「いりあい・よりあい勉強会」[2005年1月]



中スラウェシのマレナ村での交流。村の集会所に集まり、それぞれの村の経験を語り合った[2005年9月]



福島県郡山市石筵にて。中スラウェシから招いた6名とともに記念撮影
[2006年6月]

訪ねた。この頃、日本とインドネシアの山村同士の学びあいに関心を抱いていた増田が一連の活動に参加するようになった。

双方向の交流を通じ、「いりあい」を未来に活かすには、法律・経済・文化の3つの側面の課題があることが共有された。すなわち、1) 森と土地に対する村人の法的権利の確立、2) 山の多様な恵みを活かした生業づくり、3) 村に伝わる知恵や慣習・文化の再評価と次世代への継承である。

山村トンプでの映像記録と学びあい(2008~2012)

「いりあい交流」で共有された3つ目の課題に取り組む手立てとして、山村トンプに受け継がれてきた焼畑儀礼や作業プロセスを映像で記録する活動を開始した。日本の農山漁村で映像記録に長年携わってきたカメラマン・澤幡正範さんらの協力を得て、中スラウェシの若者たちとともに映像・文章・絵での記録を進めた。焼畑を基盤とした暮らしと慣習は、国の共通語であるインドネシア語や外部者が持ち込む見方や枠組みでは理解も表現もできないものが多く、メンバーは映像に記録された作業の意味・意図を村人に確認する作業を繰り返した。



陸稲の種まきを映像に記録した後、村の人びとと記念撮影[2009年1月]

2年間の記録活動は、2012年、映像記録3編(伐開の儀礼、陸稲の種まき、陸稲の収穫)と『トンプの人びとの世界(Dunia Orang Tompu)』と題したインドネシア語の冊子としてまとめられた。冊子印刷が完了する直前の7月7日、ヘダールさんが心臓発作により急逝。私たちは精神的支柱を失うこととなったが、中スラウェシとの活動は、トンプで共に学びあってきた若いメンバーに受け継がれることとなった。



籐かご作りで暮らしをたててきた女性にインタビューする中スラウェシの高校生
[2012年12月]

高校生を対象とした「聞き書き」研修(2012~)

トンプでの記録活動の経験から、中スラウェシの山村の知恵や文化に、より多くの若者が目を向ける機会をつくらうと、高校生を対象とした「聞き書き」の研修を開始した。この活動は、日本で「聞き書き甲子園」※を実施してきたNPO共存の森ネットワークと連携し、インドネシアの実情に即した「聞き書き」活動のあり方と仕組みを作り出すことを目指した。2012年9月には、西ジャワ州に位置するボゴール農科大学付属コルニタ高校での「聞き書き」研修の実施に協力し、2012年12月には中スラウェシ州パル市で周辺4校18名の高校生を対象とした聞き書き研修を開催した。この聞き書き研修の成果を冊子としてとりまとめ、2013年10月には、中スラウェシの高校・教育関係者に成果を公開するセミナーを開催した。

現在は、中スラウェシ、ボゴール、日本での「聞き書き」の活動をリンクさせることで、互いに刺激し、学びあえる仕組みづくりをNPO共存の森ネットワークと共同しながら、計画中である。

※「聞き書き甲子園」：日本全国の高校生が森・海・川の名手・名人を訪ね、知恵や技術、人生そのものを「聞き書き」し、記録する活動。2002年から毎年100名の高校生が100名の名人を訪ねている。農林水産省、文部科学省、環境省などの政府関係機関とNPO共存の森ネットワークが実行委員会を作り、企業協賛を得る形で実施されている。

2. 活動の経過（つづき）

日本の山村での活動(2007～)

「いりあい交流」を通じて訪ねた日本のいくつかの山村には、その後も通い、森づくりと地域再生の取り組みに関わった。滋賀県の朽木・椋川では、「いりあい交流」でお世話になった今北哲也さん、是永宙さんらとともに、かつて実践されていた山野への火入れ慣行を軸に、村の経験・暮らしについて聞き取りを進めた。聞き取りに関わったメンバーを中心に「火野山ひろば」が組織され、滋賀県の朽木・椋川、余呉地域で焼畑実践を通じた「くらしの森」づくりと地域再生をめざした取り組みが続けられている。「いりあい交流」で訪ねた福島県郡山市の石筵にも、年1～2回程度のペースで通い、入会をめぐる経験、村の暮らしなどについて聞き取りを続けている。

日本とインドネシア。国境を越えた交流を通じて、それぞれの地域の人びとの関わりが生まれ、マチとムラ、世代と世代をつなぐ活動へと展開してきた。今後もこのつながりを基盤に、さらに実践と学びあいを深めていく予定である。



滋賀県余呉地域では、かつて焼畑で在来のかぶで栽培されていた。途絶えていた焼畑を地元の方々ともに再現し、山かぶを収穫[2011年11月]。

2-2 西バリとの10年

あいあいネットの西バリでの活動は、2008年に正式に開始された。しかしその前、2006年暮れから現地を何度か訪問しながら公園事務所との関係作りや現状把握を行っている。さらに遡ると、2004年にインドネシアで始まったJICA技術協力プロジェクトPKPMまでその源流を辿ることができる。というのも、このプロジェクトを通じて住民主体のコミュニティ開発・協働の地域づくりのファシリテーションに共通の関心を持ち、考え方や手法を共有する仲間がインドネシアと日本の間に生まれてきたからである。そして10年がたち、コミュニティ・ファシリテーションの輪は西部バリ国立公園から周辺の自然保護地域へ広がりつつある。また主体的に動き出した村人同士のつながりも、公園周辺村の間だけでなく隣の島とも関係が広がり、さらに日本の地域とのつながりも生まれつつある。

次に、年表的に活動の経過を記したい。

2004年

インドネシアPKPM(市民社会の参加によるコミュニティ開発)がJICA技術協力プロジェクトとして始まる。和田信明(あいあいネット前代表理事)と長畑誠(あいあいネット現代表理事)が短期専門家として定期的にインドネシアを訪問するようになる。(2月)

PKPMプロジェクトが行ったコミュニティ・エンパワメントに関する最初のワークショップ(西ヌサトゥンガラ州で開催)に、エリザベス・ラハユ(エリス)が参加。和田と出会う。PKPMプロジェクトに現地専門家として参加するようになる。(4月)

長畑がPKPMプロジェクトの第一回目現地研修(パートナーシップ構築@東南スラウェシ)に参加。エリスと出会う。(8月)

エリスがPKPM本邦研修の参加者の一人として来日。研修のコースリーダーは長畑。宮城県加美町や神戸市の地域づくりの現場を訪問。エリスはこの研修で監理員(通訳)をして

いた山田理恵(現あいあいネット理事)と初めて出会う。(9月)

横浜市によるカンムリシロムク保護事業(JICA草の根技術協力プロジェクト)で西部バリ国立公園からワワン・ステアワンが本邦研修のため来日し、山田と出会う。(11月)

ヨハネス・ゲワ(ヤングワ)がクパンで開かれたPKPMプロジェクトの現地研修(Community-Based Issue Analysis)に通訳として参加。その後引き続いて同プロジェクトの研修に参加するようになる。(12月)

2005年

エリス、ヤングワは継続してPKPMプロジェクトに参加し、コミュニティ・ファシリテーションの原理と手法について研修の場で和田から実践的に学ぶ。またエリスは長畑とともに東部インドネシアの現地NGO現状調査や能力育成活動にも従事。一方、山田はPKPMのファシリテーション手法に興味を持ち、現地での研修に自主的に参加。

西部バリ国立公園から、カンムリシロムク保護事業の本邦研修としてアグス・クリスナ課長が来日。山田と出会う。(11月)

2006年

PKPMプロジェクトの本邦研修でヤングワが来日。高山(ソムニード)や神戸(まちコミュニケーション等)を訪問。日本の地域づくりの課題とインドネシアとの共通点について考え始める。(9月)

長畑と山田、初めて西部バリ国立公園を訪問。ワワンやアグスと会い、国立公園の自然保護と周辺住民との関連について話を聴く。(12月)

2007年

西部バリ国立公園で最初の調査を実施。東ヌサトゥンガラ州在住のNGOリーダー・ファリー・フランシス(PKPMプロジェクトの現地専門家)の協力を得て長畑、山田が参加。公園の周辺村を初めて訪れて村人の話を聴く。(7月)

西部バリ国立公園から横浜市による本邦研修(JICAプロジェクト)に参加するため、チャトゥール課長とナナルクマナ(ナナ)が来日。。山田・長畑と周辺村への働きかけについてあいあいネットが協力する可能性について話をする。(10月)

2008年

2度目の現地調査。西部バリ国立公園が行っている周辺住民への働きかけの現状について、プリンビンサリ村やプジャラカン村で話を聴く(山田・長畑)。(3月)

あいあいネットと西部バリ国立公園の協働協定を締結する。(5月)

国立公園側が、あいあいネットとのプロジェクトチームとして14名の現場職員を指名。最初のワークショップや現地訪問を行う。プジャラカン村とプリンビンサリ村の現状を職員たちとともに歩いて観察していく。(8月)

西部バリ国立公園での活動がJICA草の根技術協力プロジェクトとしてJICA横浜の支援を受けることに(12月～2011年6月)

2009年

1月から14名の現場職員を対象としたファシリテーション能力育成研修を開始(山田・長畑)。パートナーシップ構築から始め、観察手法、あるものさがし、コミュニティに根ざした課題分析、コミュニティによるアクションプラン作り、といった手法に関する研修を断続的に行う。エリスが4



PKPMプロジェクトでの研修の様子
(2005年、南スラウェシ州マリノ)



2007年 最初の現地調査。ヒンドゥーのお寺で村人の話を聞く



2008年 最初の公園職員とのワークショップ

2. 活動の経過（つづき）

月から加わる。PKPMプロジェクトに参加していた現地NGOや行政官の仲間数名にも、研修講師として入ってもらう。何度か研修を繰り返すなかで、現場での実践ができないメンバーが抜けていき、最終的には9名に。この9名が2010年以降、「チーム9」として村へのファシリテーション活動の核になっていく。

2010年

横浜市繁殖センターの恩田英治所長（現横浜市環境創造局動物園課）がプロジェクト評価のため西部バリ国立公園を訪問。初めてあいあいネットとチーム9の活動を視察する。（1月）

ヤングワがプロジェクトにファシリテーターとして加わる。（5月）

公園周辺村の一つであるスンプルクランポック村をチーム9メンバーやあいあいネットメンバーが訪問し、観察や対話を開始する。同じブリンビンサリ村ではチーム9メンバーのクワット・ワハユディ（ユディ）が村人との意見交換を開始。観光村振興の可能性を探り始める。（8月）

チーム9メンバーのスギアルト（スギ）、アルヤ、ガンダが横浜市プロジェクトの本邦研修で来日。豊岡市（コウノトリ野生復帰と住民の取り組み）等を訪問。またあいあいネットの報告会で西部バリ国立公園でのチーム9の活動状況を報告。（10月）

国立公園所長が「スンプルクランポック村の村人を対象にカムリシロムク的人工繁殖研修を行ったらどうか」とのアイデアを持つ。それに対してチーム9のメンバー（特にナナ、スギ）が「住民のイニシアティブを引き出すことが大事」と考えて、ファシリテーションを開始。その結果、村人対象のカムリシロムク人工繁殖研修が、スンプルクランポック村主催で開催。（11月）

人工繁殖研修に参加した村人12人が、繁殖家グループ「Manuk Jegeg（マヌックジェゲグ）」を結成。自主的に人工繁殖の準備を始め、チーム9がそれを支援していく。（12月）

2011年

ブリンビンサリ村でユディが村人たちとグロジョガンの滝に行く道を整備。あいあいネットインターンの高橋博（現事務局スタッフ）が同村に滞在し、村人と「あるものさがし」を行う。（2月）

Manuk Jegegはカムリシロムク保護協会から15つがいのカムリシロムク親鳥を借り受け、繁殖を開始。親鳥の貸与式にはバリ州知事が参加。（6月）

チーム9メンバーのユディが横浜市の本邦研修で来日。豊岡市等を訪問。あいあいネットの企画で活動報告。（10月）

ブリンビンサリ村がデンパサールの観光村展覧会に参加。その後県知事から同村がジュンブラナ県観光村に指定される。この一連のプロセスをユディが支援。（12月）

2012年

スンプルクランポック村、ブリンビンサリ村に加え、ギリマヌク村でもチーム9のメンバーがファシリテーションを開始。漁民グループによる珊瑚礁保全とマングローブ林観光に向けた動きが始まる。

ベトナム・ザーライ省マンヤン郡からJICAプロジェクトに参加する行政官たちが西部バリ国立公園を訪問。住民主体の活動を引き出すファシリテーション手法について、国立公園職員のチームメンバーやあいあいネット現地専門家たちから話を聴くとともに、村人とも交流。（3月）

ブリンビンサリ村観光委員会のメンバーらが、同じ国立公園周辺村であるスンプルクランポック村（カムリシロムク繁殖家グループ）、ギリマヌク村（漁民グループ）、プジャラカン村（ダイビング・ガイドグループ）を訪れて情報交換・意見交換。西部バリ地区全体としての観光振興の可能性を探り始める。（5月）



村の観察やインタビューの後に事実をもとに分析をする国立公園職員たち



スンプルクランポックで村人の話を聞く



チーム9のメンバーとエリス、ヤングワ

あいあいネットがインドネシア林業省及び西部バリ国立公園と新たな協定書を締結。自然と共生した村づくりに向けた活動のさらなる深化と、協働を生み出すコミュニティファシリテーションの手法を他の国立公園や自然保護地域に拡大することを目指す。さらに12月からはこの活動がJICA草の根技術協力プロジェクトとしてJICAの支援を引き続き受けることに(11月～2016年11月)。

2013年

西部バリ国立公園職員へのファシリテーション能力育成研修第2弾が開始。これまでの活動でファシリテーション技術を磨いたチーム9メンバーも講師を務める。(1月～6月)

日本の専門学校生ら15名がスンプルクランポック村を訪問。(3月)

トヨタ財団助成のプログラムで、プロジェクトチームメンバーのユディとングラ・スランガナ(ングラ)が中スラウェシ州パルとトンプ村を訪問。パルからはNGO活動家が西バリを訪問し、プリンビンサリ村で意見交換。(5月)

インドネシア・西カリマンタン州のグヌン・パルン国立公園から現場職員が西部バリ国立公園を訪れ、コミュニティ・ファシリテーションの実践について見聞きする。(8月)

西部バリ国立公園のプロジェクトチームメンバーとあいあいネットメンバーがバリ州自然資源保全事務所、東ジャワ州スラバヤ市、同州内の3つの国立公園を訪問し、意見交換。自然保護と両立した生計向上を促進するファシリテーションについて、今後の協力に向けた関係構築を開始。(9月)

東ジャワ州のバルラン国立公園とメル・プティリ国立公園から幹部・現場職員が西部バリ国立公園を訪問。住民との協働を促すファシリテーション実践について視察し意見交換。(10月)

西部バリ国立公園からプロジェクトチームメンバーのセノ課長、スギ、マデ・ムダナ、ングラが来日。豊岡市(住民と行政の協働によるコウノトリ野生復帰支援と地域振興)、阿蘇国立公園(住民と行政の協働による草原再生)、横浜市(住民主体の公園管理)を訪れ、事例調査を行う。豊岡市では現地NPOのリーダーや地域住民グループ、営農組合幹部らとの交流を通じて、西部バリ国立公園への関心が生まれる。(10月～11月)

東ジャワ州スラバヤ市の住民主導のマングローブ林再生と観光振興およびゴミ対策活動について、GPCS(グッドプラクティス事例調査)を実施。(12月)

2014年

スンプルクランポック村のあるブレレン県都シガラジャで、県の開発計画庁や関係各局との意見交換会を実施。西部バリ国立公園からの報告とともに、スンプルクランポック村のカムリシロムク人工繁殖グループが発表する。今後、県政府との協働活動の展開が視野に入る。(2月)

西ヌサトゥンガラ州ロンボク島にあるリンジャン山国立公園を、西部バリ国立公園職員チームが訪問。村人による観光振興活動について事例調査を行った。(3月)

ジャカルタの林業省森林保護自然保全総局で、西部バリ国立公園の現場職員たちが、この1年間の活動を報告。周辺村との関係作りから始まるコミュニティ・ファシリテーションの実践が高く評価された。(3月)



豊岡市の田結湿地で地元の住民ガイドの方々からお話を聞く西部バリ国立公園のプロジェクトチーム



スラバヤでマングローブ再生に取り組む村人リーダーの話を聞く西部バリ国立公園職員

3. 現場ではいま

3-1 中スラウェシの村で

中スラウェシの仲間たち

ヘダールさんとの出会いをきっかけに広がってきた中スラウェシの人びととの交流。その交流の拠点となったのがバンタヤだ。バンタヤは、弁護士としても活躍していたヘダールさんが設立したNGOで、森と土地をめぐる紛争解決と、村の慣習的権利の認知と強化を支援する活動を実施している。地元カイリ族の言葉で「村の寄り合い場所」の意味を持つその名のとおり、バンタヤには常に様々な人が集い、寄り合っていた。NGO関係者、村人、絵描き、政府役人、音楽家、教員、カメラマン、フリーターなど、私たちの活動の多くは、バンタヤにつながる人びとのネットワークと、バンタヤでの出会いと議論の中でのひらめきがきっかけとなった。

中スラウェシの村々の文化と芸能に関心を持つエウィン、カイリ族の文化の豊かさに目覚めてしまったルン、映像記録で生計をたてようと踏ん張るダフィット、生まれ育ったリンボロ村の開発に奮闘するジャック、山村トンプとつないでくれるパパ・ジャニとママ・ジャニ、そして、地元高校で教えるアニーやファツミ。ヘダールさんの急逝後も、中スラウェシでの活動はバンタヤにゆるやかにつながる仲間たちとともに進めている。



バンタヤでの議論はいつも深夜におよんだ[2007年11月]

山村トンプ

トンプは、中スラウェシの州都パル市から約15キロメートル、スラウェシ島を南北に縦断する脊梁山脈の山腹に位置する村だ。面積は6000ヘクタールあまり。標高800メートルから1000メートルの尾根沿いに集落が点在する。パル市周辺で多数派を占めるカイリ族の間では、創世神話を持つ歴史の古い村として知られている。

パル市中心部から近接しているものの、麓の村からは狭い山道を徒歩もしくはバイクでの往来となる。慣れた村人の足で麓からトンプの中心集落まで1時間あまり。電気や水道は整備されておらず、水浴び場やトイレのある家はほとんどない。インフラ整備という意味では、インドネシアの中でも開発が立ち遅れた村といえる。

トンプの暮らしの中心にあるのが焼畑での陸稲づくりだ。陸稲をめぐっては、さまざまなタブーや儀礼が今も色濃く息づく。陸稲は祈りとともに丁寧に穂刈りされ、米倉に保管され、木臼で脱穀・精米される。除草剤や機械精米は「罪深い」とされる。「陸稲は人間の化身」であり、「陸稲は金よりも大切にしなければならない」とトンプの年配者たちは語る。しかし、かつて50種を超えたという陸稲の在来種は、現在10数種にまで減少した。

こうしたトンプの状況は、村全域が国の自然保護区域に指定され、居住も耕作も禁じられたことに一因している。1975年には、当時トンプに暮らしていたという1000人近くの村人全員が域外へ強制移住となった。移住先となった低地での生活になじめず、秘かに村に戻ってきた世帯もある。インドネシア全体で民主化が進められた



陸稲は丁寧に穂刈りされる[2007年12月]

2000年前後から、さらに多くの世帯が戻りはじめた。故郷に暮らす権利を取り戻したいと村人がヘダールさんに相談に来たのはこの頃のことだ。

私たち日本人がトンプをはじめて訪ねたのが2005年。以来、頻度には差があるものの、毎年なんらかの形でパルの若者たちとトンプを訪ねている。訪ねる度に様々な変化を目のあたりにする。竹とロタンで作られた家々の中にトタン屋根が増えはじめ、中心集落にはセメントづくりの公立小・中学校が建てられた。60あまりだった世帯数は少なくとも倍増した。バイクを持つ家も増え、若者の間では携帯電話が流行りはじめた。トンプの慣習の柱といえる焼畑をやめ、カカオやインゲン豆など換金作物に転換する世帯も目に付くようになった。



道路整備も進められた[2009年1月]

トンプでの映像記録活動は、こうした変化の中で進んでいった。その土地に根ざした慣習・文化があることを外部に示すことで、トンプの人びとが故郷に暮らす権利を強める一助とすること、代々受け継がれてきた慣習・文化をトンプの人びとと共に見つめなおすことを目標とした。

記録の過程で最も変化したのは、記録活動に携わったパルの若者たちだった。2週間もあれば、村の記録は作れると話していた彼らが、結果として2年間トンプに通い続けた。焼畑をめぐる作業・行為の一つ一つに意味・意図があり、つながりがあり、トンプの世界観に根ざしていることがみえてきたからだ。ルンは、インドネシア語にしがたいカイリ語の世界に奮闘した。それはしばしば、自分たちが当たり前とってきた宗教、自然保護、芸能と対する考え方に再考を迫るものともなった。

山村の知恵と文化を次世代につなぐ

トンプでの記録活動で自分たちが経験した学びをより若い世代にも、と試みることになったのが、高校生を対象とした「聞き書き」の活動だ。日本の「聞き書き甲子園」の取組みと連携しつつ、中スラウエシの状況に即した仕組みを創り出す可能性を探っている。「聞き書き」は自然と共に暮らしてきた年配者に高校生が出会い、年配者の語りをそのまま書き起こすことに特徴がある。まさに、トンプの記録作業でパルの若者たちがカルチャーショックをうけ、奮闘したプロセスだ。2012年12月の「聞き書き研修」(パル市)、2013年10月の「聞き書きセミナー」(パル市)、2014年1月の「聞き書き研修」(ボゴール市)を経て、パル市周辺の高校間だけではなく、ジャワ島ボゴール市、さらに日本の高校との連携、中スラウエシ州の教育文化局や地元大学からの協力が生まれつつある。高校生の間では、facebookを通じたコミュニケーションが動いている。この連携や協力を活かす仕組みづくりが当面の課題である。



「聞き書き甲子園」の経験を語るNPO共存の森ネットワーク事務局長・吉野奈保子さん(右)[2013年10月]

山村の知恵や文化に対する関心が高まり、私たちにとって大切な学びの場となったとしても、山村の暮らし自体、大きく変化しつつある。トンプ周辺では金鉱開発がはじまり、「金よりも陸稲が大切」が現実には成り立たない状況となりつつある。「失ってはいけないものを見失ってはいけない。」ヘダールさんはしばしばそう語った。そのため何ができるのか。中スラウエシの仲間たちとこれからも模索していきたい。

3. 現場ではいま（つづき）

3-2 西部バリ国立公園周辺の村で

西部バリ国立公園とその周辺村

西部バリ国立公園は、その名の通りインドネシア・バリ島西部に位置する国立公園である。面積は陸地と海水面あわせて約1万9千ヘクタール。インドネシアに50ある国立公園の中では小さいほうであるが、ダイビングスポットとして有名なムンジャン島を含む海辺から、標高1400メートルの山までを含み、マングローブ林、熱帯モンスーン林、熱帯雨林、熱帯サバンナ林等の多様な生態系を育てている。ここに住む棕鳥の一種カンムリシロムクはバリ島の固有種だが、森林の減少や飼鳥としての乱獲等が原因で、野生下では数十羽が西部の半島に生き残るにすぎない状況となり、絶滅危惧種に指定されている。

さて、公園周辺にはあわせて6つの村があり、あわせて人口は約3万人。多くの世帯は農業・漁業に従事しており、その他観光業に関わる者が若干いる程度である。一部の村を除いて水田は殆どなく、主要作物は唐辛子、トウモロコシ、果樹であり、牛や豚を飼う家が多い。宗教・文化はバリ島では珍しく多様であり、殆どの村では他島から移住してきたイスラム教徒とバリ固有のヒンドゥー教徒が共存している。またバリ人のキリスト教徒が居住している村もある。

西部バリ国立公園が正式に国から指定されたのは1984年のことである。一方、これらの村はTNBBができる以前から存在している。人々は煮炊きの燃料となる薪を森から調達し、家畜の餌となる草も山から採取していた。漁民たちは周辺の海で自由に漁をしていた。また乾燥地帯にある村では貴重な飲料水の水源も山の中にあつた。そうしたところに、自然保護を第一の目的とする国立公園が出来たのであるから、村人と公園の軋轢が生まれるのは当然の成り行きであった。

スンプルクランポック村

周辺村の1つ、スンプルクランポック村は、農業、畜産業を主な生業とする、人口約3千人の村。もともとココヤシのプランテーションのために開かれたところで、労働者としてのジャワ島、マドゥラ島からの移民がいる。また、火山の噴火によって移住を余儀なくされたバリ東部の人々やティモール島に移住したバリ人が東ティモールの独立の際に脱出して戻ってきて、この村に暮らしている。

森の生態系から見て、国立公園地域の中にすっぽりと入りこんでいるこの村は、カンムリシロムクの生息地に隣接しており、昔はカンムリシロムクが飛び交い、人々と共存していたという。しかし、経済的な必要から家畜の餌を求めて森に入って草木を違法に伐採したり、密猟に手を出す村人もあり、森の自然を守ることを責務とする国立公園にとっては頭の痛い問題を抱えた村であった。一方、村人にとっても、自分たちが元々使ってきた生活の森が国立公園の一部になってしまったことで、国立公園を信用できないでいた。そのため、長い間、両者はDekat di Mata, Jauh di Hati(近くにいるのに、心は遠い)の関係にあった。



海から見た西部バリ国立公園遠景



国立公園内の道路を走る、薪を満載した村人のバイク

そんな村に、ナナを始めとする国立公園現場職員(チーム9)が「おそろおそろ」関わり始めてから4年近くが経つ。はじめは「カンムリシロムク」の「カ」の字も出さずに、村人と畑や家の中庭で四方山話をするところから関係作りを行ったが、カンムリシロムクの人工繁殖に村人自身のイニシアティブで取り組むようになり、村人と公園職員の関係は大きく変わった。今では「そういえば私は以前、違法伐採をする際、あなた(公園職員)が巡回してくるのを見張る役だったんだよ」と笑いながら話をするようになっている。カンムリシロムクの飛び交う村を目指して、人工繁殖から放鳥に向けた生息地整備、そしてそれをテコにした観光振興のために、村人たちが動き始め、公園職員はそれに寄り添う形で支援を続けている。2014年2月には、同村があるブレレン県の役場を公園職員と村のリーダー達が訪れて合同で報告会を開催し、観光振興に向けた県政府の積極的関与を求めるアピールを行った。



地域資源マップの発表(プリンビンサリ村にて)

プリンビンサリ村

公園の南側に位置するこの村には、村人が昔から憩いの場として散策していた「グロジョガンの滝」というエリアがある。数年前、この滝の周辺を村の有志で整備しようということになり、遊具やトイレ等を設置したところ、国立公園から「そこは公園の地域内であり、勝手にそのようなことをしては困る」と止められた、という経緯があり、それ以来、村と公園との関係は悪化していた。

チーム9のメンバーの一人、ユディは「まずは村人とのパートナーシップ構築」と考え、足繁く村に通い、家の庭先や果樹園等で村人たちと世間話をするところから始めた。この村は島でも大変珍しいバリ人のキリスト教徒が住む地域であり、伝統的なバリ様式のキリスト教会があったり、バリの音楽や衣装を使った礼拝があって、西洋人の観光客が時折訪れるスポットになっていた。しかし、外部の観光業者が企画したツアーを受け入れるだけで、村の側から積極的な動きを作れずにいた。ここに可能性を感じたユディは、まずグロジョガンの滝周辺のゾーニングを変更し、村人が観光に使える「利用ゾーン」にするよう、所長を通じて林業省の許可を得る手続きを進めた。さらにあいあいネットから若いインターンが村を訪れた時をねらって、外部者の目を借りてコミュニティの資源を掘り起こす「あるものさがし」を村人とともにやり、地域資源マップを作った。



スンプルクランポック村の繁殖家グループを訪問したプリンビンサリ村観光委員会のメンバー

これらの働きかけを通じて、2011年になると村の側に「自然や文化を活かした観光を振興しよう」という機運が生まれ、観光委員会が結成された。その後ホームステイの受入れ準備や観光ガイドの養成、国立公園内のトレッキング道の整備等が、この委員会のイニシアティブにより、公園が協力する形で進められた。2011年暮れにはバリ州が主催した村落ツーリズム展に参加し、バリ島内で7カ所指定された「村落ツーリズムの村」の一つに選ばれ、ジュンブラナ県知事が村を訪問して県の「村落ツーリズムセンター」として、県政府も協働して観光振興を進めることが決まった。さらに公園周辺村に呼びかけて「西部バリ村落観光」に向けた合同の動きを作ろうという動きも

3. 現場ではいま（つづき）

始まっている。

ギリマヌク村

この村は隣のジャワ島とを結ぶフェリー港があつて、賑やかなところだが、港の反対側は静かな入り江になっており、マングローブの原生林が広範囲に残っている。また古くから漁場にも恵まれ、多くの漁師が住んでおり、漁民グループが以前から形成されていた。公園職員のチーム9メンバーであるスギアルトは、今度は自分の住んでいるギリマヌクの村人のイニシアティブを引き出してみたい、と考えるようになった。そこでまず漁民グループのメンバーと海辺で話をしていくと、村人は「最近、昔のような漁獲量は望めなくなってしまった。爆弾漁を続けていたせいか、サンゴも死んでしまって、魚の数もどんどん減っている。でも、昔から漁一筋でやってきた俺達にできることはやっぱり海に関わって稼ぐことなんだよなあ。」と話し出した。その後、話をする漁師たちがひとり増え、ふたり増え、漁民グループ「カランセウ」のメンバー達が皆集まるようになり、苦楽を共にしてきた仲間たちは夜な夜な話した。海に関わって生きていくすべとして、国立公園と一緒にできることは…？以前、自分たちが爆弾漁で荒らしてしまったギリマヌク湾の美しい海を取り戻し、残されたマングローブ林を守りながら生計を立てていくことだと考えるようになったのである。

村人たちに「パートナー」として認められたスギアルトは、村人たちとアクションプランを作り、あるものを活かした、生計向上を目指した「マングローブツアー」振興の第一歩として、村人主体の栈橋づくりを開始。材料集めから建設に至るまで、掛かる費用負担も労働力の提供もすべて村人たちが自力で行い、短期間で見事に栈橋が完成した。その後、西バリの他の村からもカランセウの活動に関心を持ち、ギリマヌク湾を訪れる人々が増えてきている。栈橋から10人乗りの小さな漁船に乗ってマングローブ林をクルーズすると、漁師のガイド付きで1人10,000ルピアである。

これまで「距離は近いが心は遠い」関係だった、村人と西部バリ国立公園職員とが、お互いに歩み寄り、仲間となり、一緒に動き始めている。もちろん、立場が違えば利害も異なることもあるだろう。でも、「自然を守りながら村人の生計も向上させる」ことは、今では多くの村人と公園職員との間の共通の課題となっていると思う。そして何よりも、「みんなで一緒に何かを作っていくことは、楽しい」という感覚が、関わる人たちの間で生まれているように思う。そんな村人たちと公園職員たちの歩みに、私たちがあいあいネットは、これからも何らかの形で寄り添っていきたい。



漁民グループ総出で作った、マングローブ観光用の栈橋

4. 経験交流報告

4-1 パルとトンブ村訪問

【参加メンバー】

日本側：

壽賀一仁(あいあいネット理事)、増田和也(同)、島上宗子(同)、高田尚子(あいあいネットボランティア・元事務局スタッフ)

インドネシア側：

<中スラチーム> エウイン・ラウジェン(プダティ)、シャフルン(アワム・グリーン)、ダフィット・ラマンユキ(ジャリン)、アブドゥル・ラジャック(リンボロ村若者グループ)

<西バリチーム> ヨハネス・ゲワ(あいあいネット現地専門家)、クワット・ワユディ(西部バリ国立公園職員・あいあいネットプロジェクトチームメンバー)、ングラ・スランガナ(同、スンプルクランポック村民)

【1日目(2013年5月9日)パル到着、中スラメンバーとの顔合わせ】

15時頃、日本側(島上を除く)及び西バリチームが中スラウエシ州パルに到着。ホテルにチェックイン後、NGO”BANTAYA”の事務所にて中スラチームと合流し、自己紹介および打合せを行う。



トンブに向かって移動中の一行

【2日目(5月10日)パル→トンブ村】

朝、島上が合流。エウイン・ラウジェンを除くメンバーがBANTAYA事務所に集まり、12時30分頃、トンブ村に向けて出発。雨期のためバイクも使えず、途中から徒歩で山登りとなる。17時頃トンブ村に到着。その後、村のリーダーたち11名ほどと交流。雨天のため、集会所にて村人からお話を聞く。晩は村人の家もしくは集会所に宿泊する。

以下、交流の席での会話より(抜粋)。

◆ヤングワ「皆さんが何故ここに住み続けるのか知りたい。また、それをほかの人にも伝えたい。最近はどこが故郷なのかわからなくなっている人が多いから。インドネシア政府は大切なものをたくさん捨てた。人が共に暮らすという大切なことが、ここにあると思う。」

◆パバジャニ(トンブ村長老)「トンブ村には2001年に戻ってきた。ここのほとんどの人がそうだ。その事をヘダールさんに話したら、関心を持ってトンブによく来るようになったが、こんなに来るとは思わなかった。2004年、モトコ(島上)と会った。モトコは一週間1人でここにいた。2006年には日本へ行った。その時壽賀さんにも会った。その後、また日本人が来た。どういう風に木を切るのかと聞かれた。そこで、伐開儀礼があると話した。私は信じている事があるので、そのようにする。」

◆シャフルン「トンブとの付き合いは、活動とかそういうものではない。トンブで感じ



トンブでの話し合い

4. 経験交流報告（つづき）

た事を書こうと本を作ったが、3年もかかった。本には一部しかかけなかったが、こういう経験を持てた事はすごく大切だと思う。NGOでは「自然資源管理」とよく使うけど、その言葉を使っていたら、「トンプの人はそんな言葉を使っていた？」と、ヘダールさんとモトコさんに笑われた。」

トンプを出て行った経緯について

◆**パパジャニ**「昔はトンプに100世帯位いた。行政におどかさされ、家を3軒位焼かれたので、1975年に皆トンプを出て下の集落に行った。その後、遠くに行かなかった人はヘダールさんから帰っても大丈夫、問題ないと聞き、帰ることにした。」

◆**ヤングワ**「1975年に何故出て行けと言われたのか？」

◆**パパジャニ**「別の場所で山が焼かれた。それは他の村の人が牛の放牧のために焼いたものだったが、焼畑をしているトンプがやったに違いないと林業省が思い、出ていくように言われた。」

【3日目(5月11日)トンプ村でのあるもの探し→パル】

午前中、全メンバーが2つのチームに分かれ、集落付近を歩き、あるもの探し。集会所にて、各チームが集落で見つけたこと・気づいたことをまとめ、集まった村びと11名(うち女性4名)に発表し、意見交換をする。午後、ふたたび徒歩でパルに向けて下山。

あるものさがし(8時20分～11時頃)

テーマ:集落の資源、組織、規範に注目し、環境保全へのインパクトを考察する

グループ①:シャフルン、ヤングワ、ングラ、島上、高田

グループ②:ダフィット、ジャック、ユディ、壽賀、増田



あるものさがしの様子

あるものさがしの発表、意見交換

グループ①:

学校、モスク、水場へと移動。その後、パシさん夫妻から家を建てたときの話、クミリ(木の実の一種)の話などを聞く。発表ではグループを代表してヤングワがまとめを話し、他のメンバーが補足した。以下、発表からの抜粋。

◆**ヤングワ**「トンプの男性は常に山刀を持っているのが印象的だった。何でも山刀で作業し、山刀はいつも携帯していて常に仕事ができる状態だった。ところが、若い世代は誰も山刀を差していない。男性の山刀がトンプの知恵の象徴に思えた。山刀が男性からなくなったら、トンプの知恵はなくなるのではないか。」

◆島上「ここは15歳の子供が、突然外の大きなマーケットと渡りあわないといけなくなった感じた。変化がすごく早くて、おしゃべりから突然携帯電話に変わった。」

◆ングラ「チェーンソーなど、外から入ってくるものは止められない。しかし、今あるものを受け継ぐ事が大切だと思う。」



トンブで西バリチームと意見交換する中スラチーム

グループ②:

トンブの旧集落まで行こうとするが、そこまで行き着かず。パパイチェに会い、焼畑、鳥、自然などの話を聞いた。発表ではグループを代表して増田がまとめを話し、他のメンバーが補足した。以下、発表からの抜粋。

◆増田「トンブの生業の中心は焼畑だが、それは個人ではなく家族で持っているものだと学んだ。以前拓いた場所をもう一度拓く時、自分が拓き植えた場所でも、長老の許可を得るとの事で驚いた。個人で拓いても社会的な許可が必要で、個人のものではないのだと分かった。」

◆ユディ「集落を歩かせてもらってすごく楽しかった。下の集落がきれいに見えて素晴らしかった。黒くて尻尾が白い鳥を2羽見た。この鳥が鳴いたら、作物を植える時なのだそうだ。」

◆ダフィット「ラウロという薬になる植物は、以前下の集落に移動した時に伝わらなくなってしまったものだそうだ。若い人はこれからどんな雑穀を植えていくのだろうか。」

【4日目(5月12日)パル→マカッサル】

参加メンバー全員でパルから南スラウェシ州マカッサルへ空路移動。マカッサル泊。翌日、バリ島へ向かう。

4. 経験交流報告（つづき）

4-2 西部バリ国立公園と周辺村訪問

【参加メンバー】

日本側：

長畑誠（あいあいネット専務理事）、島上宗子（同副代表理事）、山田理恵（あいあいネット理事）、壽賀一仁（同）、増田和也（同）、高田尚子（あいあいネットボランティア・元事務局スタッフ）、加治屋聡恵（あいあいネット会員・通訳）

インドネシア側：

<中スラチーム> エウイン・ラウジェン（ブダティ）、シャフルン（アワム・グリーン）、ダフィット・ラマンユキ（ジャリン）、アブドゥル・ラジャック（リンボロ村若者グループ）

<西バリチーム> ヨハネス・ゲワ（あいあいネット現地専門家）、エリザベス・ラハユ（同）、クワット・ワユディ（西部バリ国立公園職員・あいあいネットプロジェクトチームメンバー）、ナナ・ルクマナ（同）、ングラ・スランガナ（同、スンプルクランポック村民）

【日程】

5月12日

（パルを訪問した日本からの第一陣及び西バリチーム3名とパルからの中スラチーム4名）パルから南スラウェシ州マカッサルへ空路移動。マカッサル泊。日本からの第二陣が成田を出発してデンパサール着。

5月13日

パルからの第一陣・中スラチーム・西バリチームと日本からの第二陣が合流して、デンパサールから西バリへ陸路移動。西バリに到着後、プリンビンサリ村に入り、村長や観光グループリーダーと自己紹介。4グループに分かれて村人の家にホームステイし、各家庭で話を聴く。

5月14日

西部バリ国立公園事務所を訪問し、所長・課長らと話し合い。その後国立公園内のカムリシロムク繁殖施設を視察し、地域の観光振興施設で昼食をとった後、ギリマヌク村へ。漁民グループによる棧橋建設と海岸管理活動を視察。プリンビンサリ村に戻り、ホームステイ先で夕食。

5月15日

朝、各グループでホームステイ先を散策。その後あいあいネット現地事務所に集合して、一日ワークショップ。中スラ・西バリで見聞きしたことを整理し、学んだことを出し合う。夜はプリンビンサリ村のリーダー・元牧師のアユブさんの家でお話を聞く。

5月16日

島上・増田・長畑が一足先に帰国のためデンパサールへ移動（午後の便で羽田へ）。残りのメンバーはプリンビンサリ村の集会所で、学んだこと・考えたことを発表し、村人と意見交換。その後デンパサールへ移動。翌日に帰国（帰宅）へ。



事務所でのワークショップの様子



プリンビンサリ村でのフィードバック

【ワークショップでまとめられた発見】(最終日にプリンビンサリ村でフィードバック)

＜西バリチームが中スラウェシを訪問しての発見＞

- トンプ村の人たちは、稲作にまつわる物語や儀礼を大変大切にしている。
- 村人たちは野鳥の生態や植物の状態をよく観察し、農作業の進め方に役立っている。
- 農作業は村人総出で、協力しながら行っている。
- 自然を守るための慣習法がよく守られている(成文化されていない)
- 老若男女、平等にコミュニティに参加している。
- パルの若者(エウイン、ダフィット等)や日本人(島上、増田)は村人に受け入れられ、とてもいい関係を築いている。
- 若者は農業や儀礼にあまり興味がない。携帯電話を使い、親の世代とギャップが生じている。

＜中スラチームが西バリを訪問しての発見＞

- 国立公園内の自然資源を管理・活用するため、村人が積極的に参加している。
- 村人によるカンムリシロムク繁殖活動が進んでいる。
- 村人による観光振興の活動が始まっている(観光ガイド、栈橋、等)
- 稲作から換金作物へ、作物が変化している。
- 村に住む若者が減っている。
- 一部の村人は公園の森が自分たちに大切な資源であることに気づいていない。
- 村の社会的な組織(村人の自主的なグループ活動)はまだ活発である。
- 子どもの教育に関する意識が高く、経済的な向上に結びついている。
- まだ伝統的な文化を保持している。

＜日本側が二つの地域(中スラと西バリ)を訪問しての発見＞

- 村には多様な資源がある(カカオ、豆、米、芋、牛、山羊、学校、教会、etc.)
- 「変化」がある(焼畑から常畑へ、換金作物へ、村の組織の変化、儀式の変化)
- 新しいものと古いものの併存(焼畑と換金作物、ノコギリとチェーンソー、慣習と携帯電話)
- 「内」と「外」の良好な協力関係(外部からの支援、NGO等、村外に住む村人、行政)
- 「あるもの」を活用する能力
- 村が社会的な単位となっている。
- 人の動きが激しい

【経験交流を通じて見えてきた課題】

＜変化にさらされる村＞

焼畑やそれにまつわる儀礼に象徴されるように、頑なに伝統的な暮らしを守ってきたトンプの村人も、特に若者の間では、焼畑をやめ、カカオなどの換金作物栽培を基盤とした暮らしを志向する人々が増えている。プリンビンサリ村では、教育を受けた

4. 経験交流報告（つづき）

若者がみな大都市へ働きに出てそこで暮らすようになり、村は経済的には豊かになったものの、高齢化が進んでいる。この変化は、まさに日本が戦後の高度経済成長から今に至るまで経験してきた道に続いているように思える。これから村はどこへ行くのか。インドネシア社会全体の変化も視野に入れながら、見極めていく必要がある。

<古いものを残しながら新しいものに対応する>

しかしながら、トンプにしても、プリンビンサリにしても、日本の地域が辿ってきた道をそのまま踏襲するかというと、そうではないかもしれない、という面もまた見えてきた。伝統的な稲作を守りながら換金作物も作る。携帯電話を使いこなしつつも、電気のない村の生活に馴染む。一見するとハリウッドカビバリーヒルズのように整理整頓された住宅街であるプリンビンサリ村でも、教会を中心とした人と人の繋がりが強く存在し、ホームステイを組織的に行える力量がある。昔からのコミュニティの絆が残っている今の段階で、これから予想される大きな変化に対応し、軟着陸を図る、という可能性も充分あるのではないか。

<あるものを活用した村づくり>

「変化」に対応して馴染ませる、という今後の課題にとって重要と思われるのは、「ないものねだり」ではなく「あるものを活用する」という姿勢だろう。そもそもトンプの村人は「そこにあるもの」「代々受け継いできたもの」を大切にしながら村の将来を作っていきたいと考えているし、プリンビンサリ村でも、地域の資源を掘り起こして観光を振興させようとしている。「変化」に絡め取られて為す術もなく漂流するのではなく、自分たちの強み、「あるもの」を把握してそこに軸足を置く、という地域づくりが必要ではないか、ということがトンプとプリンビンサリ村から見えてくる。

<外部者が村と関わる作法>

そんなトンプ村にも、プリンビンサリ村にも、外部から足繁く通い、村人と関係を築いている人たちがいる。トンプの場合は若い世代のNGO活動家たちと、あいあいネットの日本人。西バリの場合は中年世代が中心の西部バリ国立公園職員やあいあいネットの仲間たち。どちらも腰を据えて村に継続的に関わり、その他の外部者も巻き込みながら、「協働」の地域づくりを目指している。この外部者の関わりかた、その作法を明文化していくことが、これから明らかにしていくべき、もう一つの課題である。



経験交流参加者たち全員集合

4-3 デンパサールでのワークショップ

2013年10月16～17日、デンパサールのホテルSantika Kutaを会場に、今回の「経験交流プログラム」のまとめを行うべく、ワークショップが開かれた。

【インドネシア側】

エウイン・ラウジェン（プダティ）、シャフルン（アワム・グリーン）、ヨハネス・ゲワ（あいあいネット現地専門家）、エリザベス・ラハユ（同）、クワット・ワユディ（西部バリ国立公園職員・あいあいネットプロジェクトチームメンバー）、ングラ・スランガナ（同、

スンプルクランポック村民)

【日本側】

壽賀一仁(あいあいネット専務理事)、長畑誠(あいあいネット代表理事)、島上宗子(あいあいネット副代表理事)、増田和也(あいあいネット理事)



ワークショップの様子(デンパサール・ホテルサンティカにて)

ワークショップはまず、あいあいネットとの関わりを通じた「学びあい」の10年を振り返る作業から始められた。パルチームは日本側の島上、増田と2004年から開始された「いりあい交流」で具体的にどんな活動をしたのか、どんな出会いがあったのかを書き出し、西バリチームは2008年からの活動を振り返り、さらにエリザベスとヨハネスゲワの2名はそれに加えて2004年から始まったJICA技術協力プロジェクトを通じて日本のあいあいネット関係者とどう出会い、何をしたかを書き出していった。パルでの活動と西バリでの活動は、内容は異なるが、どちらも日本とインドネシアの現場活動家が出会い、お互いのInteractionを通じて学びあったこと。そしてその結果として、今度は主にインドネシア側のメンバーが「外部者」としてトンプ村やスンプルクランポック村、ブリンビンサリ村等に関わるようになり(中スラウェシの場合は日本人も直接関わってきた)、村に少しずつ変化が生まれてきた、というプロセスが明らかになった。

次に、各チームごとに「これらのInteractionから、どんな教訓が得られたか」を各人が書き出す作業を行った。その主な内容は次の通りである。

【中スラ組】

地域コミュニティの培ってきた知恵や知識は私たち(外部者)の目を開かせた
トンプの村人が望んでいるのは「鳥が鳴き、木々が茂り、水が流れる」村
地域の人々の力を信じること、地域の歴史を知ることの大切さ
地域の人々の経験や知識を書き残すことが若い世代にとって重要
地域の自然資源管理について、コミュニティと行政の間で協力をしていくことが大事
地域の森の問題は世界に繋がっている

【西バリ組】

事実に基づいてファシリテーションすることで、本当の参加が生まれる
ファシリテーターが地域コミュニティと関係者を適切につなぐことで、地域の課題解決に向けた活動が持続的に生まれていく

日本とインドネシア双方で学びあうことを通じて、お互い共通の目的やビジョンを見いだしていくことができた

自然資源管理に関する社会的・経済的課題を分析するために、村の歴史を調べていくことが入口になる。

地域コミュニティを変えようとする前に、まず自分自身が変わること

コミュニティ開発は、そこに既にあるものに根ざすことで容易になる

地域の人たちの活動に寄り添えば、互いを尊重しあえる関係を作ることができる

最後に、各参加者が「何も村に持ち込まずに村人どう関係を築くのか」「活動を通じて自分にどんな変化があったか」「村にはどんな変化があったか」「トンプや西バリの経験の何が興味深かったか」について書き出し作業を行い、2日間のワークショップを閉会した。



活動を振り返り、教訓を考え、書き出す

5. 見えてきた課題

1)「古いもの」と「新しいもの」の共存に向けて

今回の経験交流を通じて、中スラウェシや西バリの村では、伝統的な稲作と換金作物栽培、宗教を通じた人びとの濃い繋がりとビバリーヒルズのような個別の住宅、といったように「古いもの」と「新しいもの」が並存していることが確認された。こうした変化は、現在までのところ、日本の高度経済成長のようにある程度の時間の経過のなかで社会が変わっていくものではなく、電気のない村のトータルな暮らしのなかにある日突然携帯電話が入ってくるような類のものである。そこには、日本の地域が戦後辿った道とは異なるシナリオが待っているであろうし、それに応じた対応の仕方があるであろう。ここから見えてきたのは、現在並存している「古いもの」と「新しいもの」を、どちらかがどちらかを凌駕する、あるいは一方が他方を全否定するといった対立項に置くのではなく、どのようにしてこれからの地域の暮らしのなかで共存させていくか、という課題である。

日本でもインドネシアでも、固有の自然と文化に根ざした暮らしの営みは常に変化にさらされてきたが、これまで人びとは入ってくる「新しいもの」を受け止め、地域に馴染ませるために時間をかけて工夫と努力を重ねてきた。ところが、昨今のインドネシアの村々において「新しいもの」は、ある時間の経過のなかで徐々に入ってくるのではなく、落下傘のようにある日突然入ってきて、携帯電話もカカオもチェーンソーもすでに暮らしのなかで馴染んでしまっている。現在定着しているものをただ否定するのは建設的ではないが、暮らしのなかで存在する「新しいもの」を「古いもの」との単なる並存から共存へと変えていくためには、それらをあらためて受け止めなおし、地域の文脈に馴染ませなおすことが必要であろう。

しかし、両者の共存にとってそれ以上に重要なのは、それぞれの地域の風土のなかで生きていこうとする次世代の人びとが「古いもの」をこそ受け止めなおし、これからの暮らしの文脈のなかであらためて馴染ませることである。今回の経験交流でも明らかになった通り、中スラウェシでも西バリでも若者は村を離れ、陸稲・雑穀(中スラウェシ)や水田耕作(西バリ)にかかわる伝統儀礼をはじめ、文化、知恵、暮らしのあり方など、長年の歴史のなかで培われてきた「古いもの」は高齢者の間にしか残っていない。つまり、自らのなかで存在しない「古いもの」を残しながら「新しいもの」に対応するというのは、今までにない考え方や情報、技術を身につけて育った若い世代には困難である。したがって、村で生きていこうとする若い世代の人びとが、まず地域固有の自然と文化に根ざした「古いもの」を受け止めなおし、自ら思い描く次世代の暮らしの文脈のなかで馴染ませていくことが必要である。「あるものを活用する」前に、まずは村に「あるもの」・代々受け継いできたものを把握してそこに軸足を置くこと、それによってはじめて「古いもの」と「新しいもの」を共存させ、社会の大きな変化のなかでも軟着陸を図る可能性が見えてくると考えられる。

2)「外部者」が村に関わる作法とは

今回参加した住民主体の地域づくりに取り組む実践者たちは、外部から足繁く村へ通い、「当事者」である村人自身が自分たちの「あるもの」と「課題」を理解し、具体的な目標に向けて動いていけるようまなびあいやファシリテーションを通して関わり、というあいあいネットと実践してきた「外部者」の作法の有効性を再認識することができた。その一方、現時点では前述の通り、中スラウエシでも西バリでも「古いもの」と「新しいもの」は村の暮らしのなかで並存するにとどまっている。とするならば、両者の共存に向けて、「外部者」としての関わりをさらにどのように高めていくか、というのが次なる課題だが、それに取り組むヒントは経験交流中の議論のなかに見いだすことができる。

これまでトンプ村との関わりでは、とにかく村に出かけて行き、歴史や儀礼をはじめ暮らしのあらゆることに耳を傾け、書きとめてきた。本や映像にまとめられたそれらの記録は、若い世代につなげたい「古いもの」への気づきにあふれている。しかし、現在のところ、「新しいもの」との共存に向けた村人自身の具体的な動きにはつながっておらず、たとえば山の斜面では陸稲に代わって換金作物のカカオ栽培が広がっている。こうした村の変化に対して中スラウエシの実践者は、「外部者」は何も言えないというスタンスを守りつつ聞く作業を続けており、村人のなかからは「トンプの土地は売買対象にしない」「村の外に出た人に戻ってきてほしい」といった声がポツポツ出てきているという。聞くということから超えない、村人の意識を超えない、村はぐずぐず変わる、といった考えは日本の地元学と呼応するものであり、「外部者」が村に関わる作法として聞くことの力をよりいっそう追求することが有効であろう。

また、今回の参加者はいずれも腰を据えて村に関わり、その他の「外部者」も巻き込みながら協働の地域づくりを目指している、ということも経験交流のなかで確認された。西バリの実践者は他地域へ異動したことがない行政官で、長年取り締まり対象だった村人に制服を脱いで話を聞きに行き、友人になるという人間関係の大転換を経て、あいあいネットのメンバーとともに、近隣に住む国立公園職員として村人と問題解決に取り組んでいる。一方、中スラウエシの実践者は若い世代のNGO活動家だが、彼らもまた村とのまなびあいは期限付きのプロジェクトではなく、いつも新たな気づきがある継続的なプロセスなのだと考えている。こうした関係性を踏まえて関わりをさらに高めていくには、単なる「外部者」(風の人)から、「当事者が置かれている暮らしの文脈を共有できる外部者」(土の匂いのわかる風の人)へと変身しながら、その他の「外部者」も巻き込んだ協働を進めていくことが必要だと思われる。

調べた人しか詳しくならない、というのは地元学の基本である。「古いもの」と「新しいもの」が単なる並存から共存へと変わっていくためには、「当事者」である村人自身が動き、「当事者」同士の経験交流が進んでいくことが必要かつ効果的であり、そのためにも「外部者」である実践者が村に関わる作法の向上に努めていきたい。

6. 次の10年にむけて

「トヨタ、ホンダだけではなく、イリアイの経験を伝えてほしい」。

「いりあい交流」は、ヘダールさんのこの言葉が構想のきっかけとなった。今、振り返るとこの時から、私たちは「古いもの」と「新しいもの」の共存のあり方を模索していたのかもしれない。ヘダールさんは、「トヨタ」「ホンダ」に代表される先進技術と経済発展の日本に、森があり、田が広がり、祠があり、入会が今なお息づく村々が今なお存在していることに衝撃をうけていた。経済発展しても、近代化しても、日本は文化の根っこを失っていない。日本にはインドネシアの将来を考えるためのヒントがたくさんある。私たちは逆に、そんなヘダールさんのまなざしに触発され、日本の経験と今を新たな目で見なおすこととなった。

「いりあい交流」での学びから、私たちは山村トンプでの映像記録、そしてインドネシアの高校生を対象とした「聞き書き」活動を試みてきた。ある意味「意外」だったのは、インドネシアでもマチの若者とムラの年配者が化学反応を起こす可能性がある、ということだ。日本で「聞き書き甲子園」が10年にわたって大きな広がりや成果を生み出してきた背景の一つは、日本の高校生と自然を活かす知恵や技を持つ年配者（“名人”）との間の物理的・心理的距離と、距離があるからこそ出会ったときに起こる化学反応だといえる。

一方、インドネシアでは、農山漁村の暮らしが日本よりも身近にある。都市でも市場にいけば、近隣の村々から集まる野菜や鶏、手作りの竹箒や籠がごく当たり前にある。「身近」で「当たり前」だろうものに、インドネシアの高校生はどんな視線を向けるだろうか。スーパーマーケットが増えはじめ、家電製品が浸透しはじめている中で、農山漁村の知恵や技は「遅れたもの、価値の低いもの」として映りはしないのか。そんな懸念があった。トンプでの記録作業の過程で、パルの若者たちが山村の知恵や文化に改めて気づき、惹きこまれていく姿に、日本と共通する可能性を感じていたものの、それが高校生の「聞き書き」という形で広がりを持ちえるのか、確信はなかった。まずは試みて、それから考えよう、というスタンスだった。

中スラウェシのパル市と西ジャワのボゴール市で聞き書き研修を実施し、もしかしたら、何か動き出すかもしれない、という手応えを感じている。ボゴール市近郊に暮らす高校生フィナは、近くで山羊を飼う一人暮らしのおばあさんに聞き書きをした。聞き書きをする前は、「貧しくてかわいそう」と思っていたおばあさんが、自らの力で稼ぎ、子供を育て、日々を感謝して生きていることを知った。聞き書きセミナーの席で彼女は、「私の“名人”、カッコいいんです！」と聞き書きの成果と経験をいきいきと報告した。

聞き書きでは、語り手の言葉を録音し、一言一句書き起こすという地道な作業が必要となる。国の共通語であるインドネシア語とそれぞれの現地語が会話に混じることの多いインドネシアではなおさら忍耐と時間が必要だろう。それでも、研修に参加した高校生たちはみな、深夜まで作業を続け、聞き書き作品を仕上げた。中スラウェシの高校に通うアニッサは次のような感想を残した。



聞き書きした名人について語るフィナ
[2013年10月]



深夜まで続いた聞き書き作品づくり
[2012年12月]

「(前略)・・・聞き書きが一番盛り上がったのは、書き起こしと文章づくりだ。たぶん、みんな同じ意見だと思う。このプロセスが一番むずかしい。なぜなら、じっくり何度も何度も聞いて、書いて、一つ一つの言葉が文章になっていくように構成するのはすごく難しいことだから。名人の言葉はあまり重要でないものは削れても、一つも変えてはならないのだから。わあ、これってアメージングで難しい。でも、難しさをみんなと共有して、冗談をいって楽しめば、重荷も少し軽く感じられてくる。そして、すべてがしあがったとき、わあ、やっとなんとできる。一つの作品を仕上げるのは簡単なことではないんだ。よりよい結果、より満足できる結果を得るには、ほんとに真剣に一生懸命やらなければならない。でも、やってみる価値はある。なぜなら、難しいと感じることよりも、後で得られる満足感のほうが、意味があるからだ。聞き書き最高！」

インドネシアの高校生に「聞き書き最高！」と感じさせた要因は、農山漁村の“名人”に出会ったことだけではないだろう。研修で日本人と出会えたこと、日本にも同じように聞き書きに取り組む高校生がいると知ったこと、高校生同士で交流できることなど、いろいろあるだろう。高校生たちは、聞き書きのプロセスでICレコーダー（最近では各自のスマートフォンの録音機能を使う高校生も増えてきた）を使い、パソコンに入力し、作品を仕上げていく。そして、研修に参加した者同士、フェイスブックで交流しあう。高校生たちは「新しいもの」を使いこなしながらも、「古いもの」をカッコいいと感じる感性を併せ持っていた。見方をかえれば、「新しいもの」と「古いもの」が交じり合うからこそ、おもしろく、最高だと感じられたのかもしれない。であるとしたら、日本とインドネシア、マチとムラ、世代と世代をうまくつなぎ、刺激をうけあえる仕掛けをつくることで、「新しいもの」をとりいれながらも、「古いもの」失ってはならないものを見失わない未来をつくっていく一歩にできないだろうか。インドネシアでの「聞き書き」は、そんな可能性を感じさせる試みとなった。

西バリからのメンバーとともに山村トンプを訪ね、村の人びとと語り合った際、「右手に山刀、左手に携帯電話」がこれからのトンプの男の理想像かもしれないね、という話になった。トンプの男たちは、山刀一つで焼畑地を整え、家を建て、屋根を葺き、動物をさばく。山刀一つで自然を活かし、生きる術を身につけている。しかし、山刀だけでは、増え続ける現金需要を満たし、今トンプに起こりつつある変化に対処しきれないのも現実だ。携帯電話をはじめとした「新しいもの」をとりいれ、外とうまくつながりあいながら、自然を活かす知恵や技、伝統も失わない。冒頭のヘダールさんからの注文は、そんな未来と一緒に創ろうとの呼びかけだったのかもしれないと今思う。



山刀一本で家を組み立て、屋根を葺く
[2008年1月]

島上宗子（あいあいネット副代表理事）

6. 次の10年にむけて（つづき）

「村人とはすでに『友達』だと思っていたが、単なる『知り合い』であったことに気付いた」「これまで考えたこともなかったような些細なことがコミュニティにとって大切であることをまなべた」— これは、インドネシア・西カリマンタン州のグヌン・パルン国立公園で、あいあいネットが実施した「コミュニティ・ファシリテーション」に関する研修を受けた現場職員が述べた感想である。私たちあいあいネットがずっと関わってきた西部バリ国立公園と同様、この国立公園も長年、周辺住民らによる違法伐採等に悩まされてきたが、現場職員たちは、それにどう対応したらいいか、糸口をつかめずにいた。「外から何も持ち込まず」「友達になる」ことから始めるあいあいネット流の関わり方に接した彼らは、当初は混乱していたが、研修を通じて村に通うとともに、西部バリ国立公園で実績を積んだ、同じ現場職員であるスギやナナ、ユディの話をお聴きすることで、少しずつ変わってきた。何よりも、「コミュニティと同じ目線に立って、コミュニティからまなぶ」という姿勢を持つことで、これまで見えなかったもの、或いは見ようとしなかったものが見えてきたようだ。

「友達になる」と同様に大事なものは、「そこにあるひと／ものから始める」ことだと思う。西部バリ国立公園の仲間たちも、最初は「村人は教育レベルが低いし、貧しくて何もできないから、自分たちが援助してあげないと」と考えていた。けれども「あるものさがし」を通じて村を虚心坦懐に観察し、五感で感じ取り、村人の話を謙虚に聴いていくことで、村にはさまざまな可能性があり、村人は自分たちが知らないことをたくさん知っていて、潜在力をもっている、ということを実感していった。そして公園職員である彼ら自身が変わったことで、村との関係も変化し、村人のイニシアティブを引き出せるようになってきたのである。

「村にあるもの」を見つめ直すことは、村人自身にとっても必要かもしれない。「あるものさがし」は外部者の目を借りて自分たちの地域を「再発見」する試みだし、中スラウェシ・山村トンプでの「映像記録と学びあい」も、村人に自分たちの歴史や暮らしを見直す機会を作ってきた。「外部者」はそういう「刺激」をもたらす役割も果たせるのではないだろうか。

「カンムリシロムクの繁殖活動は順調に進んでいるけれど、この活動をしてきた『僕ら』のことをもっと多くの人に知ってもらいたいし、自分たちがしてきたことの『物語』を伝えていけたらいいのに」と私たちに相談してきたのは、西部バリ国立公園周辺村の一つ、スンプルクランポック村の繁殖家グループの若手リーダー、ラハビットさんだ。村人の活動を外につなげ、専門家やメディア、自治体やNPO、企業等との連携を促すのも、外部者の役割だろう。あいあいネットは元来、「まなびあい」をその活動理念としてきた。だから、単なる「つなぐ」のではなく、それを通してどれだけ「豊かなまなびあい」を双方にもたらすことができるのか、ということが大切なポイントになる。

あいあいネットの次の10年は、実践者と実践者、現場同士をつないで、どのような「まなびあい」を作っていけるのか。さらなる挑戦を続けたい。

山田理恵（あいあいネット理事）

7. 未来への提言

まなびあいは世界を変える！

2004年4月、仲間とともに「いりあい交流」の活動をトヨタ財団のアジア隣人プログラムに申請する際、自分たちのグループ名をどうするか、いろいろ悩んだのを覚えている。コミュニティの共有自然資源の管理と住民主体の地域づくりが密接に結びついていることを重視していたので、「いりあい」と「よりあい」という二つの言葉は容易に浮かんだ。そこで団体名として語呂がいいので「あい」で終わる言葉をもう一つつなげよう、となったのだが、なかなかいい言葉が浮かばない。「ささえあい」「つなぎあい」「ふれあい」・・・いくつかの単語が候補となったが、最終的に「まなびあいだよね」ということになり、「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」(略称あいあいネット)という団体が生まれたのである。

それから10年経った。この10年のさまざまな活動といろいろな出会いを経て、いま、私たちは声を大にして言いたい。「まなびあい」こそが、これからの社会を作っていく鍵だ、と。

いわゆる「援助」に関わる場面では、どうしても援助する側が、される側に対して「教えてあげる」「支えてあげる」という非対称な関係を作ってしまうがちである。けれども、私たち自身の苦い経験を振り返れば、そういう非対称な関係からは、決して生産的な、創造的な動きは生まれてこないことは明らかである。援助が依存を生み、援助する側もまた、そこに依存していく。これは決して海外援助だけの現実ではないだろう。世の中には、一方的な上下関係、支配し支配される関係が満ち溢れている。そしてグローバル化の中で私たちはみな、お互い同士、生き残るために競争し続けなくてはならない、「自己責任」の世界に生きている。

けれども、中スラウエシの山村で、西バリの農村で起こったことは、それとはまったく異なるベクトルを持っている。「初めて村に行く時は、何が必要かを聞くのではなく、そこに何があるか、どうなっているのか、をひたすら聞いていくことで、村人のもっている歴史や知恵や文化を学ぶことができる」(パルのNGO活動家ルン君)。「村に行くときは、(公園職員としての)制服を脱いで、自分をさらけ出すことが大事」(西部バリ国立公園のユディさん)。村人から学ぶ、という姿勢を取り続けていくと、村人のほうも「あなたの話を聞きたい」という気持ち生まれる。「まなびあい」は何よりもまず、自分自身の先入観を捨てて、自分の知らないことを素直に受け入れることが第一歩となる。そして相手と対話し、互いに自分たちの経験や事実を一緒に掘り下げていくことで、何か新しい発見に至るのである。

この世界には、自分とは異なるもの、異質な社会や異質な考えをもつ人たちがたくさん存在している。そうした「異質な存在」を自分の対抗相手ととらえるのではなく、互いに受入れ、対話し、交流し、新しいもの創造する機会とすること。それこそが、「まなびあい」のもつ力であり、だから「まなびあいは世界を変える」可能性を持っているのだ。私たちあいあいネットは次の10年、こうした「まなびあい」をさらに進めていく存在でありたい。

8. 経験交流参加者の声

トンプだホイ:私の「いりあい交流」

2013年5月、今にも雨が降り出しそうな暗い空の下、私たちはトンプに向かう山道を歩き出した。これまで何度、この道を行き来しただろうか。時にはバイクの後部にまたがり、時には一步一步と足取りを進めながら歩き、車に揺られたことも二度ほどあった。それと結びつくようにして、その時どきに同行した顔ぶれが浮かんでくる。今回は、あいあいネットから寿賀さんと高田さんが、そして、西バリの国立公園からユディさんとグラさんも一緒だ。皆、初めてトンプに向かうメンバーで、新鮮な気分でのトンプ訪問だ。そのようなことを思いながら、これまでの中スラウエシでの取り組みをあらためて振り返ってみた。

私がいあいネットに関わるようになったのは、2006年の「いりあい交流 in Japan」がきっかけだ。それまでにインドネシア・スマトラの農村に滞在する機会があり、慣習にもとづきながら森と関わる村の暮らしのあり方に興味をもつようになった。その一方で、アブラヤシ農園による大規模な森林開発が進行するなかで、村の暮らしは大きく変化しつつあり、土地の権利をめぐる紛争が村の内部やその周辺で生じていた。こうした諍いにしばしば遭遇するなかで、こうした問題に対して何かできないかと考えていた。とはいえ、インドネシアの法制度を勉強するにはインドネシア人にとっても叶わないと思っていたし、現地ですばしば見られるような抗議行動は、現地に暮らす人ならいざ知らず、外国人にすぎない自分がこれに与することにも何かちがうと感じていた。そうしたなかで、「いりあい交流」の取り組みに出会った。入会地をめぐる日本の経験をインドネシアに伝えることで、インドネシアに別の道筋を示そうという趣旨は、まったく別の角度から土地問題に向きあおうとするようで、私には想像外のアイデアであった上に、日本人だからこそできる取り組みと思えて、たいへん魅力的に見えた。こうして、私は「いりあい交流」に関わりはじめ、そのなかでトンプ集落と出会うことになった。

「トンプの慣習では、初めてここを訪れた者は一芸を披露することになっている」
2007年2月、私は初めてのトンプ訪問を実現することができた。バンタヤとよばれる集会所で村の人びとに迎え入れられた際、同行したヘダールさんはニヤリとしながら、こう言った。突然の展開に動揺しつつも、人びとの視線を集めるなかで苦し紛れに思いついたのがある歌だった。小学校(中学校の時だったかもしれない)の林間学校で習った「キャンプだホイ」という歌だ。歌詞中の「キャンプ」を「トンプ」に置き換えて、とにかく歌ってみた。シンプルなメロディーにトンプという文字が登場したためか、集まった村の方々はひとまず笑顔で受入れてくださった様子だった。その後も訪問を重ねる度に、私はこの「トンプだホイ」を歌うはめになった。しだいにマスタといえはこの歌と結びつくようになってらしく、私の顔を見るなり、この歌を歌い出す女性もいた(なおトンプでは、この歌のタイトルは「ダホイ」と縮めて覚えられているようである)。

中スラウエシでの「いりあい交流」は、トンプでの焼畑耕作に焦点を当てながら、映像やイラスト、文章で、村の暮らしや森との関わり方を記録することが目指された。そして、そこから、我々メンバー一同を含む、街に暮らす者が忘れかけていた、あるいは知らない地域の知恵やわざのもつ意味を、たんなるノスタルジアとしてではなく、私たちの存在そのものに問いかけようとするものであった。映像やイラストについての技術をもたない私は、ただただトンプに足を運ぶだけだったが、数度目の訪問の際にはトンプのキーパーソンであるパパ・ジャニに連れられ、彼らがトンプを政府によって追い出された後に長らく暮らしてきたパロロ地域に向かい、今でも娘一家が暮らす山麓の住まいを訪れた。

移住先であるパロロの村にはブリリという名が付けられていた。中スラウエシに暮らすカイリ人の中では、トンプは人間が最初に大地に降り立った地として伝えられている。とくにトンプ集落の北に位置する山の頂きはブリリとよばれ、そこは人間の頭であり、そこから延びる稜線は身体だといわれる。このようにカイリの創世神話において、ブリリとは人間という存在の始まりの地であり、世界の中心であり、トンプを象徴する地名なのであろう。一方で、移住先に付けられたブリリという名前。トンプを離れざるを得なかった人びとは、どのように故地を思い、そして、新しい地でどのような暮らしをしてきたのか。そのようなことを思いながら、しだいにトンプ出身者の移住先での暮らしにも関心が向くようになった。

「いりあい交流」では、ヘダールさんを中心とするパルのメンバーの力はかけがえないものであった。社会問題に対して、たんなる「対抗」「抵抗」ではないかたちの、自由でユニークなアイデアを出していこうという雰囲気をつくり出していたがヘダールさんだった。そのようななかで、ヘダールさんの突然の訃報はメンバーの間にぽっかりと大きな空洞を残したようだった。とりわけ、日頃からヘダールさんを慕い、そこに集まってきた中スラウエシの村びとや若いメンバーにとっては、尚更のことであつたであろう。しかし、パルの残されたメンバーたちは喪失感を噛み締めながらも、それぞれに新しく動き始めている。エウインは、政治の世界に飛び込もうと、次の選挙を意識した活動を始め、長かった髪を切っていた。ルンは人と人をつなぐような仲介者としての役目を積極的に意識しながら行動を広げているようだし、ダフィットはますます映像制作にのめり込んでいるようである。彼らは、これまでの活動に熱心に関わってくれた上に、私と年齢が近いこともあって、私はとくに親しいものを感じているが、前回の訪問では彼らが頼もしく見えるようになってきた。おそらく、それぞれに自分の役割や目指すものの方向が具体的に意識されるようになってきたのだろう。

こうした彼らの変化を見るなかで、私は私自身が問いかけられているように思える。私自身は自分の役割をどのようにとらえ、どのような方向に向かおうとしているのか。島上さんは、これまで共存の森ネットワークによって日本で展開してきた「森の聞き書き甲子園」の取り組みがインドネシア・西ジャワで始まろうとしていることをきっかけに、これを中スラウエシにも広げようとしている。そのようななかで、私はあいもかわら

8. 経験交流参加者の声（つづき）

ず同じ場所で足踏みを続けているような状態だ。

これからの「いりあい交流」を思う時、まだまだトンブでやりきれていないと思えることがらがまらずに浮かんでくる。たとえば、私たちはトンブの限られた人びとしか話ができている。私たちがこの間に主におつきあいしてきたのは、トンブのなかでも長老とされる方々とその家族たちであり、しかもカリンジュとよばれる小集落に暮らす人びとが中心である。それでは、たとえばトンブの若い世代は、私たちのこれまでの取り組みをどのように見てきたのだろうか。そして、彼らはトンブに押し寄せる近代化や外部社会からの流れをどのように向きあおうとしているのだろうか。また、カリンジュ以外の集落の人びとはどうなのだろうか。トンブのなかで一番奥まったところにあるのがボボ集落である。そこには一度だけ出かけたことがある。ボボに暮らす人びとはその後どうしているだろうか。

時どきにしか訪問できない外部者だからこそできること、日本という異なる文化に暮らしてきた者だからこそできること。現時点では具体的なアイデアがあるわけではないが、限られた時間ながらもトンブに向かい、まずはこれまで見落としてきた村で起きている「現実」や「事実」に目を向けながら、トンブの人びとと何かがつながるような広がりを目指したい。

「この関係を絶やさないように」。トンブを後にする時に、よくパパ・ジャニがかけてくれる言葉だ。「よい友好関係が続きますよう」。ヘダールさんもこのような言葉を残した。目新しい取り組みだけが意味をもつわけではなかろう。地道に、愚直ながらも足を運び続けるだけでも意味があるにちがいない。西バリの取り組みで、村びとや国立公園職員の意識が重なりあうようになったのは、そうしたことの成果なのであろう。ならば、私もそれを原点としてトンブや中スラウエシに足を運び続けよう。「今日から友達／明日も友達／ずっと友達さ……」。「トンブだホイ」(正しくは、本家本元の『キャンプだホイ』)の最後のフレーズだ。そこに込められた思いが言葉だけで終わらぬよう、挫けぬよう。今回の企画を通じて、これまでの取り組みを振り返るなかで、あらためて思ったことだ。

増田和也(あいあいネット理事)

経験交流プログラムを通じて、「共存」というキーワードが浮かび上がってきた。新しい×古い、若者×高齢者、外部×内部、人×自然、移住×定住、男×女など、2者の関係性は様々な所で見受けられる。持続的な暮らしを創っていくには共存は切っても切り離せないことだが、その共存を実現するためにはどのような事が必要なのか、以下に、経験交流プログラム、それにあいあいネットでの活動経験、最近の静岡での暮らしなどを振り返り、2者の共存を実現させるために必要な事は何なのか、自分の考えた事をまとめてみたい。

境界を越える

私たちは意識をしなかったら、自分の決まった世界からなかなか出ないのではないだろうか。日々仕事をしながら家族と暮らし、友人や身の回りの世界と交わりながら生きていく。無意識でいると、何となくできてしまった自分の殻からは出ない気がする。2者のもう一方は、今の自分の周りにはないから対極に表現されるのだと思う。見るからに遠くかけ離れている、というものの以外にも、目線を変えただけで見えてくるもの、時間の使い方を変えたら見えてくるものなどもあるのではないか。大切なのは、あえて足を踏み出すこと。今までと異なる世界に入ってみるということが、対になる相手との共存を考えるうえで大切なのではないかと思う。

相手の懐に入って、経験を共有する

境界を越えるというのは、お互いを知るための第一歩ではないか。そして一歩足を踏み出した後に大切なのが、相手の懐に入って経験を共有する事ではないか。これは、まなびあいプログラムに参加して特に感じたことだ。今回は西バリチーム、パルチーム、日本人が一緒になって山や町を歩き来し、一緒にご飯を食べて一緒に村で眠ることができた。また、その滞在先は私たちと共に活動をしているトンプ、プリンビンサリだった。あいあいネットの関係者、村の人々とある程度の時間を一緒に共有できたことで、時間を共有できた人を身近に感じ、自然に相手の事をもっと知りたいと思うようになった。プレゼンや講義を聞けば何となく相手の事を知ったような気になるし、研修やミーティングの場で話してもある程度は分かる事があると思う。しかし、相手が日々直面している“場”でその人と行動を共にする事は、他では作れないつながりが生み出されるのではないかと思う。

相手の良さを認める

共存は、「お互いに相手を認めている」という事が前提にあって成り立つのではないか。経験を共有して共に時間を過ごしていけば、徐々に相手の長所、短所が見えてくると思う。その中で、まずはお互いに相手の良さをきちんと認める、それが共存のスタートではないだろうか。

お互いの不得手な所を知る

相手の良さを認めると同時に、お互いが不得手としている点を知る必要もあると思う。不得手な点があるという事は、つまり協力・共働が生まれる可能性がある箇所ではないだろうか。お互いに相手を認めていても、助け合ったり支えあったりする事がなければ、ただ隣に存在しているだけになってしまう。自分の、相手の不得手な部分を知り、協力し合う事で足りないものを補う。お互いに必要な存在になってこそ、共存関係が生まれてくるのではないだろうか。

高田尚子（あいあいネット理事・元事務局スタッフ）

トヨタ財団 2012年度 アジア隣人プログラム
特別企画『未来への提言』報告書



インドネシアと日本の地域をつなぐ ～あいあいネット10年間のまなびあい報告～

固有の自然と文化に根ざし、多様な主体が協働し響きあう地域を目指して

発行日
2014年3月31日

編集・発行
一般社団法人あいあいネット
〒214-0031 神奈川県川崎市多摩区東生田1-14-5 アムールK2 102
E-mail welcome@i-i-net.org URL <http://www.i-i-net.org>